

開催地名：愛媛県上島町	
開催日時	令和元年 11 月 20 日（水） 14：20～15:50
開催場所	上島町立岩城小学校
語り部	岩橋 光善 （福島県南相馬市）
参加者	上島町民 約 60 名
開催経緯	<p>本町は、南海トラフ地震防災対策推進地域に指定されており、町の総合防災訓練においても南海トラフ巨大地震を想定した避難訓練及び各種訓練に取り組んでいるところである。訓練をはじめ防災に関する各種取組において、実際に経験した人の体験談は現実的な緊張感をもたらし、災害に直面した際にも大きな意味合いをしめすと思われる。しかし、広域に渡り被害をもたらした南海地震を始め、大きな災害を経験した人々の高齢化に伴い災害の記憶が薄れつつある。よって、高齢層から若年層への災害伝承が大きな課題となっている。</p>
内容	<p>（１）南相馬の状況</p> <p>平成 23 年 3 月 11 日、14 時 40 分、震源地が三陸沖の地震が発生した。南相馬の震度は 6 弱であった。気象庁は津波警報を発令し、最初は 3 メートルという予測だったが、すぐに 6 メートルに更新された。15 時 35 分頃、津波が南相馬に到達した。</p> <p>3 月 12 日 18 時 25 分に、政府は東京電力第一原子力発電所から半径 20 キロ圏内の住民に対して避難を指示した。南相馬市内でも、20 キロ圏外にバスを使って避難を開始した。数日のうちにさらに状況は厳しいものとなり、県外への集団避難が始まった。新潟県の上越市、糸魚川市、群馬県の吾妻町、片品村に、集団でバスによる避難を行った。大きな荷物を持っていく事はできないので、本当に手回り、身の回りの物だけを持って避難所に集合し、そのままバスに乗せられて避難していった。家族もばらばらだった。地震と津波の被害だけであれば、仮設住宅に家族ごとに避難できる。地域のコミュニティも壊れない。しかし、原発事故は別である。コミュニティごとに避難できなかったため、避難先では本当に見知らぬ方々だけで、なかなかコミュニティを形成するのに時間かかった。孤独にさいなまれ、相談できない、話し相手もない、そういう環境があちこちで見られた。</p> <p>南相馬は、1 市 2 町が合併して 12 年になる。現在の人口は 45,000～46,000 名で、20,000 名程度がまだ戻っていない状況である。ましてや、小高区については、震災前に 12,000 名ほどの人口だったが、ようやく 3,610 名が戻ってきたに過ぎない。これが原子力災害の状況である。津波被害だけであれば、一時的に避難してもすぐに戻ることができ、仮設住宅に家族で避難できるわけだが、原子力災害は、圏外に避難する必要がある、家族がばらばらになって避難していた。南相馬は、今現在、世帯数は震災前とほとんど変わらないが、帰還した方々が、今は</p>

ばらばらに住んでいる。3世代で居住してた家族が、各家族でばらばらになっているため、世帯数がそれほど大きくは減ってないという状態である。

南相馬市では、震災の被害は福島県で一番大きかった。直接亡くなった方が525名、行方不明者が111名いる。これらに加え、避難中に仮設住宅等で亡くなった関連死が513名に達している。直接亡くなった方、行方不明の方の合計に迫るくらいの関連死が発生していることに注目していただきたい。(関連死には自殺者も含まれる)

## (2) 復興に向けて

地域住民が生き残らなければ地域の復興はできない。住民が存在しての復興である。無人になった所に復興はない。まずは生き残ることが重要だ。また、避難ということは、全て他の人に頼るといことである。全て他人の援助や協力で成り立っており、他人の世話にならないと暮らしていけず、計り知れないほど精神的な苦痛を受ける。これが避難である。本当に「惨めなこと」だと感じた。したがって、避難者にならないよう、自分でできることは予め実行することが大切である。最低限必要なものを備蓄すること、近所の方々とコミュニティを作って、日頃から繋がっていること、これらはとても大切なことであると思う。

南相馬市は旧中村藩である。国の重要無形文化財に指定されて、1,000年の歴史があると伝えられる神事、「相馬野馬追」が有名である。震災で大きな被害を受けても、「相馬野馬追」はこの地区の一つの心として、何があっても守っていく、一つの大きな力になっている。高齢化も進み、伝統行事の継承が困難になってきている中で、伝統行事を守っていくことが復興につながると信じ、その活動を現在行っている。皆さんも伝統行事を大切にしてもらいたいと思う。



開催地より

防災訓練をはじめ、地域の防災活動における自助・共助の推進など、今後の防災活動に非常に役立つ内容だった。